

(3)

東京都品川関係各団体の歓迎関係

品川関係各団体の歓迎関係

RA'-0192

0330

20 3274 草稿

昭和三十四年五月四日

財団法人 日本

会長

外務省儀典室

木村市柳官殿



正ア協会



ニイ共和国スカルノ大統領歓迎の件

前略

陳者この度インドネシア共和国のスカルノ大統領が国賓として来る
六月六日来朝される予定でありますので、同大統領に対する我が国
民間としての歓迎につき御相談申し上げます。御多用の処誠に恐縮な
がら左記に依り御臨席賜るよう御願ひ少々御案内申し上げます。

記

一日時 五月七日（木曜日）午後二時

六会場 日本工業倶楽部（丸の内一ノ三）

RA'-0192

0331

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan

外
務
省
印
刷
局
印

スカルノ・インドネシア 大統領接遇計画

内 容

接遇の趣旨	1
東京都の接遇について	1
1. 東知事出迎え	1
2. 東京都の鍵贈呈	2
3. 東京都体育館屋内プールの視察案内	2
4. 歓迎レセプションの簡権	3
ア 歓迎レセプション実施要領	3
イ 歓迎レセプション実施編成表	6
ウ 東京会館平面図	7
エ 歓迎会場見取図	8

別 添 (参考)

I スカルノ大統領日程(外務省発表)	9
II スカルノ大統領略証()	14
III スカルノ大統領一行名簿()	16
VI インドネシアの地理	21
V インドネシアの国内政情	22
IV インドネシアの外交	24

広報渉外局外事部渉外課

RA'-0192

0332

スカルノ、インドネシア大統領接遇計画

待遇の趣旨

スカルノ、インドネシア共和国大統領は、随員を伴い、きたる6月6日(土)わが国を訪問、同月19日まで滞在する予定であるが、政府はその滞在期間のうち、6月6日から10日までの5日間、同大統領を国賓として待遇することになった。

本都は、今回のインドネシア大統領の訪日を機会に、日伊両国の親善関係を一そう助長するため、下記により、大統領一行を接遇する。

東京都の接遇について

1. 都知事の出迎え

(ア) 出迎え

日時 6月6日(土) 12時35分到着
特別機(パン、アメリカン航空、ボーイング377)
場所 羽田国際空港
要領 外務省の出迎え要領に従い、知事参列して行う。
服装 モーニング、コート
備考 知事は12時までに空港に到着、

(1)

(1) 出発日時

日時 6月19日(金) 22時45分羽田空港発
特別機(パン、アメリカン航空ボーイング377)

要領 未決定

2. 東京都の鍵贈呈

日時 6月6日(土) 18時

場所 迎賓館

要領 知事は迎賓館を訪ね大統領に謁見、東京都の鍵を贈呈する。

服装 モーニング、コート

備考 知事は定刻3分前までに迎賓館に到着

3. 東京都体育館屋内プール視察の案内

日時 6月7日(日) 午前10時50分大統領 到着
" 11時10分 " 発

場所 東京体育館 屋内プール

要領 東京体育館長案内及び説明
外務部長 随行

服装 平服

備考 屋内プール視察前に、国立競技場の視察が行われる。午前10時45分 同競技場発

(2)

4. 歓迎リセプションの開催

主催 東京都

日時 6月10日(水) 16時～17時

場所 東京会館(2階グリーン、ルーム)

服装 平服

来賓 大統領及び随員一行、インドネシア大使館関係、
内閣総理大臣、外務、通産両省関係、都議会関係

(ア) 歓迎リセプション実施要領

14:30 諸準備完了

15:00 係員配置完了

15:30 一般来賓到着

15:40 知事、議長、副知事、副議長、広渉委員長、及び8団体代表者等到着

15:50 知事、議長、谷会長(広渉局長、外務部長)等玄関に整列して出迎える。

16:00 大統領及び随員到着、(駐車係は到着と同時に合図)

エレベーターノ台にて2階会場に案内する。

16:03 大統領及び随員入場
(受付係は入場前司会者に合図)

(3)

司会者

「たゞ今、スカルの大統領閣下が御到着になりました。

知事の先導にて、所定の位置につく。

(庶務係は、随員がメイン、テーブル付近に大体到着した頃を見計らって司会者に合図)

~~16:05 「両国々歌演奏」~~

司会者

「たゞ今からインドネシア及び日本両国々歌を演奏いたします」

16:10 「知事の発声で乾杯いたします。」

(国歌演奏終了直後：シャンパンの行き直るのを待つて)

16:12 スカル大統領発声にて返杯

16:12 } 歓談
17:00 }

大統領退場の際

司会者

「ただいま、大統領閣下が御退場になります。」

大統領及び一行退場

(4)

総理大臣、知事退場

一般来賓退場

(備考) 以上の要領により歓迎リセプションを終る予定であるが、大統領のあいさつがあった場合は、下記の要領による。

16: 未定 司会者

「これよりスカルの大統領閣下のごあいさつがあります」

16: スカル大統領あいさつ

16: 司会者

「続いて東知事のごあいさつがございます」

16: 東知事あいさつ

16: 司会者

「続いて、協賛各団体を代表して日本インドネシア協会協会々長谷正之氏のごあいさつがございます」

16: 谷協会々長あいさつ

16: 司会

「以上をもちまして、ごあいさつを終ります」

17:00 司会者 閉会のことば

(5)

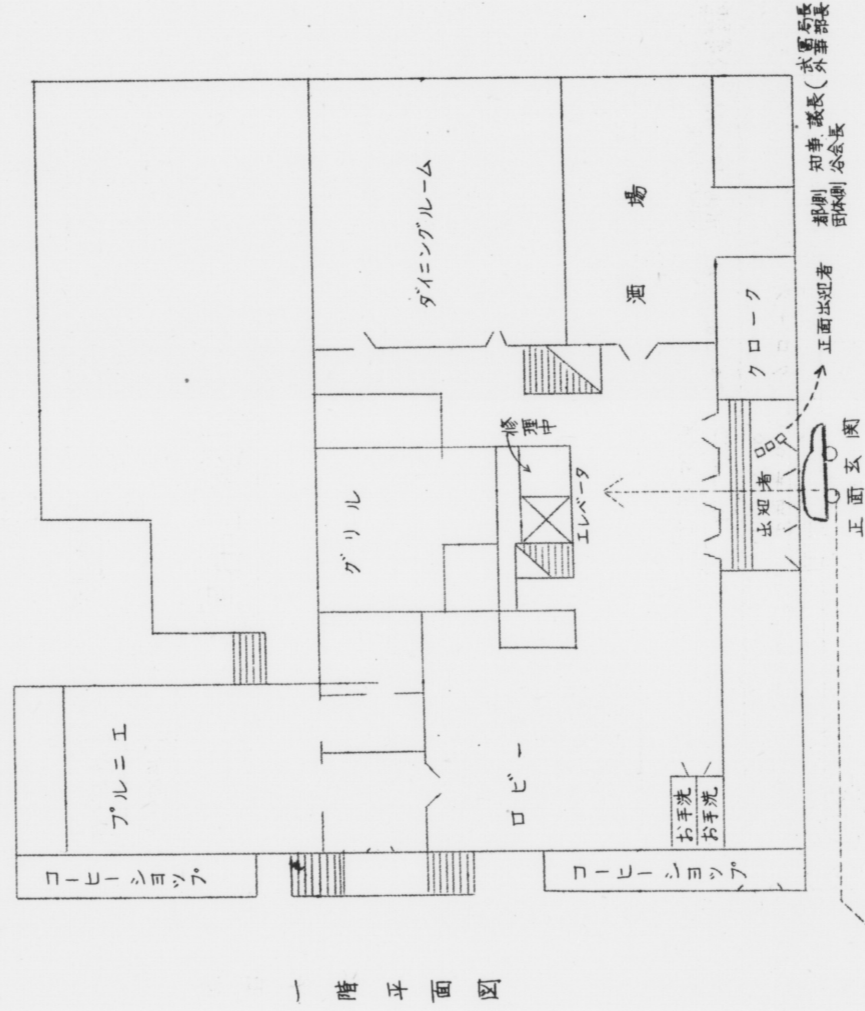
(1) 歓迎レセプション実施編成表

武富局長 大田広報部長 山畑課長 藤田課長
 佐藤外事部長 朝日課長 新庄課長

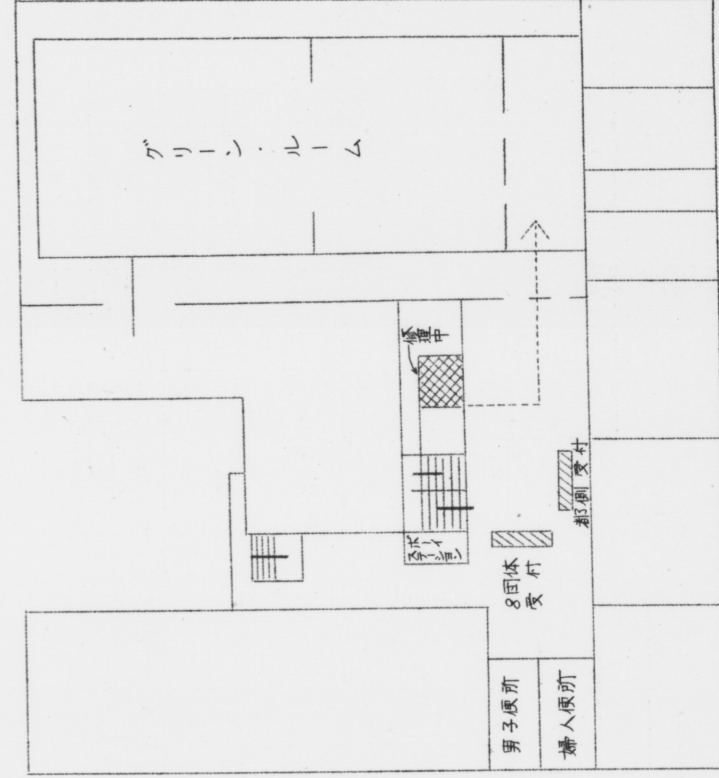
係長	分掌	事項	原	氏名	
				係長	員
司会及び連絡係	① レセプションの司会 ② 他係との連絡			草場	小川、工藤
庶務係	会場設営その他			丹羽	橋島、鈴木
受付及び案内係	貴賓、来賓の受付、案内、(玄関、エレベーター含む)			宮林	富永、栗川、大田原、清水、角井、水川 (兼、会務係員2名)
報道係	報道関係者の統制と整理(報道課と連絡)			中川	報道課員1名
音楽隊係	音楽隊の進行(消防庁、音楽隊との連絡)			佐藤(セ)	桑川、田村
駐車、警衛係	駐車場の整理とその連絡(警視庁及会館側との連絡)			竹内	足立、石井、警視庁より制服、私服若十名を派遣(警視庁で交通整理及び警衛の事)

- 備考 (1) 実施日時 3月 6. 10 16:00~17:00 ◎知事連訳 中谷 義 男
 (2) 実施場所 東京会館 2階 グリーン・ルーム
 (3) 当日来賓予想人員 約 300 名
 (4) 当日係員は 15:00 迄に現場に集合の事

(ウ) 東京会館平面図



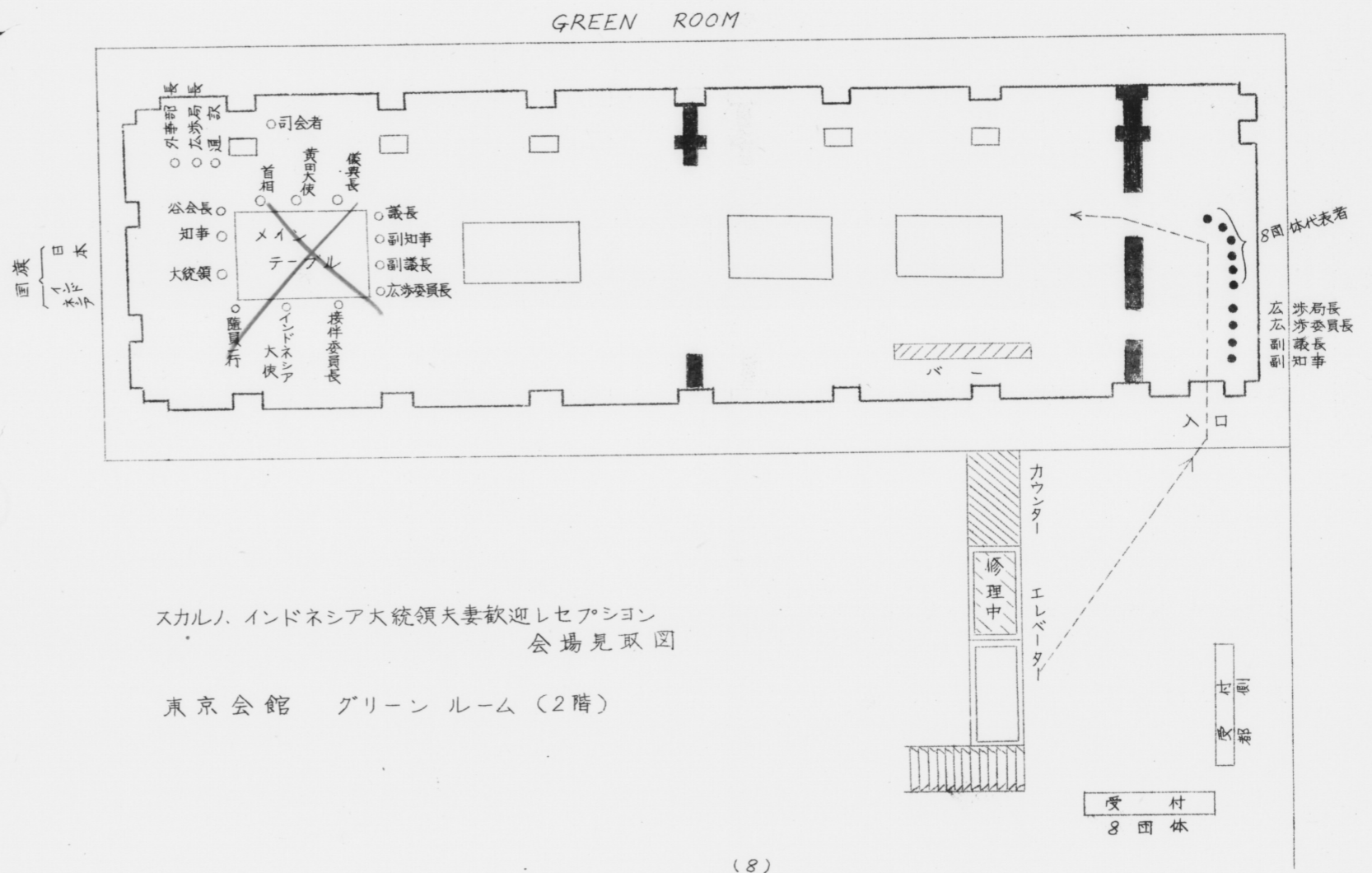
一階平面図



二階平面図

(2)

(工) 歓迎会場見取図



RA'-0192

0337

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan

1 スカルノ大統領日程

6月6日(土)

12.35	羽田着	特別機(パン・アメリカン航空、 ボーイング377機) (服装=モーニング・コート) 天皇陛下御出迎へ
		空港行事
12.55	羽田発	天皇陛下御同車、自動車お列
13.25	迎賓館着	
15.30		岸総理大臣の来訪を受くる(服装 =モーニング・コート)
16.00		東京都知事より東京都の鍵贈呈 (服装=モーニング・コート)
16.30		テレビ・ラジオ・ニュース映画を 通じてメッセージ発表(約10分) (於迎賓館)
18.55		迎賓館発
19.00		インドネシア大使館着(非公式晩 餐)
21.30		同 発
21.35		迎賓館着

(9)

6月7日(日)

10.00 迎賓館発 (服装=平服)
 10.15 国立競技場着 視察
 10.45 同 発
 10.50 東京体育館屋内水泳場着 視察
 11.10 同 発
 11.25 迎賓館着
 13.00 同 発
 13.15 歌舞伎座着 観劇
 14.30 同 発
 14.45 迎賓館着

6月8日(月)

9.45 迎賓館発 御料馬車(高松宮殿下御同車)
 (服装 モーニング・コート)
 10.30 皇居着 天皇・皇后両陛下と御会見
 11.00 同 発 (御料自動車)
 11.18 迎賓館着
 11.33 天皇陛下御答礼
 16.00 } 内外記者会見(於迎賓館)
 17.00 }
 18.57 迎賓館発 (服装 正装又はイヴニングドレス)
 数着服用

(10)

19.15 皇居着 宮中晩餐

21.20 宮中夜会
 22.15 同 発
 22.33 迎賓館着

6月9日(火)

10.45 迎賓館発 (服装 平服)
 11.00 国会着 衆・参両院議長主催
 歓迎レセプション
 12.15 同 発
 12.30 迎賓館着
 16.55 同 発
 17.00 インドネシア大使館着 在京インドネシア大使主催
 レセプション
 18.30 同 発
 18.35 迎賓館着
 19.30 同 発
 19.45 総理官邸着 岸内閣総理大臣主催晩餐
 (服装 ブラック・タイ)
 21.45 同 発
 22.00 迎賓館着

(11)

RA'-0192

0339

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan

6月10日(水)

9.05 迎賓館発 (服装、平服)
 9.30 国立博物館着 視察
 10.20 同 発
 10.40 整肢療護園着 視察
 11.10 同 発
 11.35 迎賓館着
 15.45 同 発 (服装、平服)
 16.00 東京会館着 東京都知事主催
 東京商工会議所、国際商業会議所
 日本委員会、経済団体連合会、
 日本経営者団体連盟、経済同友会、
 アジア協会、日本インドネシア協会
 アジア善隣国民運動、合同共賛、
 歓迎レセプション
 17.00 同 発
 17.15 迎賓館着
 19.10 同 発 (服装、正装又はイヴェニング・ドレス)
数章着用せず
 19.20 光輪閣着
 19.30 スカルノ大統領主催晚餐
 21.30 同 発
 21.40 迎賓館着

スカルノ・インドネシア共和国大統領の国賓としての公式行事終了

(2)

自6月11日

非公式滞在

至6月19日

6月19日(金)

22.45 羽田発 離日 特別機

(パン・アメリカン航空

ボーイング707機)

(3)

RA'-0192

0340

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan

II スカルノ大統領略歴

- 1901年 6月6日ジャワ島スラバヤにおいて出生(58才)。
- 1925年 バンドン工科大学を卒業、その前後から学生グループを中心とする民族運動に参加。
- 1927年 同志とともに「インドネシア民族連盟」を結成。
- 1928年 5月インドネシア民族連盟を「インドネシア国民党」に改組し、その党首となる。
- 1929年12月オランダ当局より逮捕され、反乱陰謀罪をもって起訴され、懲役4年の判決を受く。1931年インドネシア国民党解散、その一派が「インドネシア党」を結成。当時出獄し入党。1933年7月再び政治犯としてオランダ当局に逮捕され、翌年2月フロレス島エンデに流刑。次で1937年スマトラ島ベンクーレンに移され引き続き抑留。
- 1942年 日本軍の「オランダ領東インド」占領により、7月ベンクーレンから解放され、ジャカルタに入る。日本軍政に協力。1943年3月「民衆総力結集運動」の指導者となり、1944年3月、これが「ジャワ奉公会」に改組され、その会長に就任。同年9月設置された「中央参議院」の議長に選ば

(14)

れ、また、1944年11月日本を訪問し、勲二等瑞宝章を贈与さる。1945年8月、日本軍当局によって設置された「独立準備委員会」の委員長となる。

- 1945年 8月17日「インドネシア共和国」(ジョクジャカルタ)の独立宣言と同時に大統領に就任、オランダにたいする革命斗争を指導。1948年12月、オランダ軍に逮捕され、当初パラバット(北スマトラ)次いで、バンカ島に抑留さる。
- 1949年 7月バンカ島から解放され「インドネシア共和国」大統領に復帰、オランダとの間にハーグ円卓会議協定成立。12月27日「インドネシア連邦共和国」として独立を承認され、大統領に就任。
- 1950年 8月連邦制が廃止され、単一「インドネシア共和国」となり、引き続き大統領として留任、現在に至る。
- 1958年 1月アジア、アフリカ諸国訪問の途次日本を訪問。
- 1959年 4月23日 ジャカルタを出発、トルコ、ポーランド、ソ連、北欧、南米諸国を歴訪、今回の訪日となる。

(15)

Ⅱ スカルノ大統領一行名簿

インドネシア共和国大統領	スカルノ閣下(H.E.Dr. SUKARNO)
(公式随員)	
2. 最高裁判所長官	ウィルヨノ・プロジョディコロ閣下
3. 大統領府官房長官	タムジレ・スタン・ナラウ 閣下
4. 外務次官	スウィト・クスマウィダグド 閣下
5. 大統領侍医	スハルト博士
6. 西部ジャバ地区警察本部長	エノッホ・ダヌブラタ
7. 大統領府長	スハルジョ・ハルジョワルド
8. 第二地区軍司令官	ハルン・ソハール 中佐
9. 海軍陸戦隊司令官	インドラ・スバギョ 中佐
10. 空軍本部人事局長	スルヨノ 中佐
11. 外務次官秘書官	イルマス・ハムザー
12. 大統領先任副官	ラハマン・マシュール 中佐
(普通随員)	
13. 大統領副官	モハマッド・サブール少佐
14. 大統領副官	D. ナンローイ少佐
15. 外務省儀典局次長	イブヌ・スウォンソ・ハミムザール
16. 大統領府書記官	ジャミン
17. 情報官	ジョン・センドウック
18. アンタラ通信社編集長	アダム・マリク
19. PIA通信社編集長	アディネユロ

(16)

(非公式随員)

20. 外務省通訳官	トム・アトキンソン
21. 大統領付	トゥキミン
22. 同	スパルト
23. 空 軍	ストロ中尉
24. 陸 軍	イスハック・ラティアフ 中尉
25. 大統領付	マンギル
26. 写真技師	K. A. ラハマン
27. 映画技師	W. シリトンガ
28. ラジオ・インドネシア	ダルモスゴンド
29. 随 従 員	H. N. L. トビン
30. 同	ハルトノ

(17)

His Excellency Dr. Sukarno
President of the Republic of Indonesia

Official Members of the Suite:

2. H.E. Dr. Wirjono Prodjodikoro Chief Justice of the Supreme Court
3. H.E. Dr. Tamzil St. Narayau Director of the Cabinet of the President
4. H.E. Mr. Suwito Kusumowidagdo Secretary General of the Ministry of Foreign Affairs
5. Dr. Soeharto Physician to the President
6. Mr. Enoch Danubrata Chief of Police of West Java
7. Mr. S. Hardjowardojo Chief of the Household of the President
8. Lt. Col. Harun Sohar Commander of the IInd Division of the Army
9. Lt. Col. Indra Subagyo Commander of the Marine Corps of the Navy
10. Lt. Col. Suryono Staff Officer, Director of Personnel of the Air Force
11. Mr. Iljas Hamzah Secretary to the Secretary General, Ministry of Foreign Affairs
12. Lt. Col. Rahman Masjhur Senior A.D.C. to the President

Members of the Suite:

13. Major Moh. Sabur A.D.C. to the President
14. Major D. Nanlohy A.D.C. to the President

- | | |
|--------------------------------|--|
| 15. Mr. Ibnu Suwongso Hamimzar | Deputy Chief of Protocol,
Ministry of Foreign Affairs |
| 16. Mr. Djamin | Secretary of the Cabinet of the
President |
| 17. Mr. John Senduk | Press Officer |
| 18. Mr. Adam Malik | Chief Editor, Antara Press Agency |
| 19. Mr. Adinegoro | Chief Editor, P.I.A. Press Agency |

Unofficial Members of the Suite:

- | | |
|-----------------------|---|
| 20. Mr. Tom Atkinson | Interpreter, Ministry of Foreign
Affairs |
| 21. Mr. Tukimin | Personal Assistant to the President |
| 22. Mr. Suparto | Personal Assistant to the President |
| 23. Lt. Sutoro | Air Force |
| 24. Lt. Ishak Latief | Army |
| 25. Mr. Mangil | Personal Assistant to the President |
| 26. Mr. K.A. Rachman | Photographer |
| 27. Mr. W. Silitonga | Cameraman |
| 28. Mr. Darnosugondo | Radio Republic Indonesia |
| 29. Mr. H.N.L. Tobing | Attache |
| 30. Mr. Hartono | Attache |

IV インドネシアの地理

インドネシア共和国は北緯6度(北スマトラのサバン島)から赤道を下つて南緯11度(ナモール島の属島たるロテイ島)の南、東経75度(北スマトラ北端)から135度(アラフラ海のアルー諸島付近、ニューギニアを加えると140度を越える)に及ぶ。アジア大陸とオーストラリア大陸にはさまれ、かつ太平洋とインド洋の間に散在する大小あわせて3,000余の島からなっている。主な島嶼は下のとおりである。

大スンダ列島に属するスマトラ、ボルネオ(カリマンタン)、ジャワ、セレベス(スラウエン)、小スンダ列島(バリ、ロンボック、スンバワ、スンバ、フロレス、ナモール各島)、モルッカ群島(ハルマヒラ、ブルー、セラム)アルー群島、タンニバル群島。この中ボルネオ島北部は英領、ナモール島東部はポルトガル領であり、西ニューギニアについては、オランダは同国領のたてまえをとつて統治しているが、インドネシア側は同地域にたいする主権を主張し現在なお所屬問題が争われている。

V. インドネシアの国内政情

インドネシアにおいて地方問題および内政の刷新問題をめぐる国内状況が深刻化して来た1956年末、スカルノ大統領は西政的議会民主主義はインドネシアの国情に適せずとし「指導民主主義」体制の建設をとらせたが、1957年2月21日その実現の具体的構想として国民総代表で構成され、議会及び内閣への勸告を行う機能をもつ国民評議会の結成、および共産党を含む内閣の組閣の二政策をとらえ、内外に強い反響を起した。この内閣者については回教政党、軍部等に反対が強く実現に至らなかったが、前者についてはスカルノ大統領の実現の決意は固く、ジュアング内閣成立に際してこの実現が同内閣の使命の第一となった。

かくてジュアング内閣は就任早々7月12日、定員25名の議員からなる国民評議会を組織、発足せしめるとともに、依然解決をみない地方諸地域に対しては引続き漸進慰撫政策をとり、中央地方間会議の開催、首相以下首脳部の遊説その他の措置をとった。しかし対外面では同内閣は1957年秋国連第12回総会に西ニューギニア問題をまたもや提出し、西ニューギニアをインドネシアに返還することに關する話し合をオランダ・インドネシア間に再開せしめるため国連がイニシアティブをとることを要求した。しかしこの決議が否決されるやインドネシア官民は極めて烈しい対オランダ報復行為に出で、政府は12月1日KLM航空の乗入禁止

(22)

一部オランダ人に対する退去命令、オランダ系企業労働者に対する一日罷業指令などの措置をとったため、当のオランダの抗議はもとより西欧陣営一般の批判をまねくこととなった。その政府は状況の鎮静につとめ、オランダ系企業は政府の管理下におきつつ生産を継続せしめ民間の過激な行動を抑制した。

スカルノ大統領の主張する「指導民主主義」体制にたいしては、それが同大統領によるジャワ族中心の一種の独裁政治を意味するものとして野党たるマシユミ党その他の保守政党をはじめ、スマトラ、セレベスなどの地方も強い不満を示し、地区軍の反乱事件などが発生した。1958年2月15日には中部スマトラのパダン及びブキナギを本拠とする「インドネシア革命共和国」政権が中央政府に対し公然反復をひるがえす事態が発生した。中央政府軍は3月10日から軍事行動を起し、次々と主要拠点を占めたが、反乱軍は現在なお北及び中部セレベスその他の山岳地帯においてゲリラ戦を行っており、内戦の完全鎮圧は当分困難とみられている。

またこの内戦勃発とともにインドネシア国内には戒厳令がかけられ陸軍参謀長ナスケヨン中将を軍政長官とし各地区軍司令官をそれぞれの地方における軍政官とする軍政が施行されており、国民評議会や内閣にも軍人が参加し、一般行政にたいし軍当局が強い発言権をもっている。この戒厳令は1958年12月をもって期限が満了したが、さらに1ヶ月延期された。

(23)

VI インドネシアの外交

独立以来のインドネシア外交政策は、自由、共産、いずれの陣営にも加担しないとする中立政策を基調とし、1950年4月にインドネシアを招請求国として開催されたアジア・アフリカ諸国会議の決議、すなわち平和共存を中心とする十原則による同地域諸国との友好関係の強化により相対立する世界の二大陣営の橋渡しを行い、恒久的な世界平和を実現しようとするものと考えられる。

しかしこのインドネシア外交における中立政策なるものの在り方を振り返ってみると、それはインドネシア独立の経緯からして、この国が自由陣営に左袒することを阻止せんとする共産党一派、国民党等の左翼急進勢力と親英米派と目されるマシュミ党その他の保守勢力の妥協から打出された政策といえよう。

アメリカはインドネシア独立後向もなくノ徳ドルの借款を与えたが、その後余剰農産物協定その他による経済援助のほか、その動きは積極的とは云えぬものがあり、これがインドネシアのソ連圏接近の原因となっているが、革命政権樹立による内戦においてその主要拠拠が政府軍によって簡単に攻略されるという事態にともない、アメリカの出方も積極的となり、小型武器の輸出、ICA等による援助を強化し、インドネシアとの国交関係も最近著しく改善されつつある。イギリスもオランダの反対を押し切つて

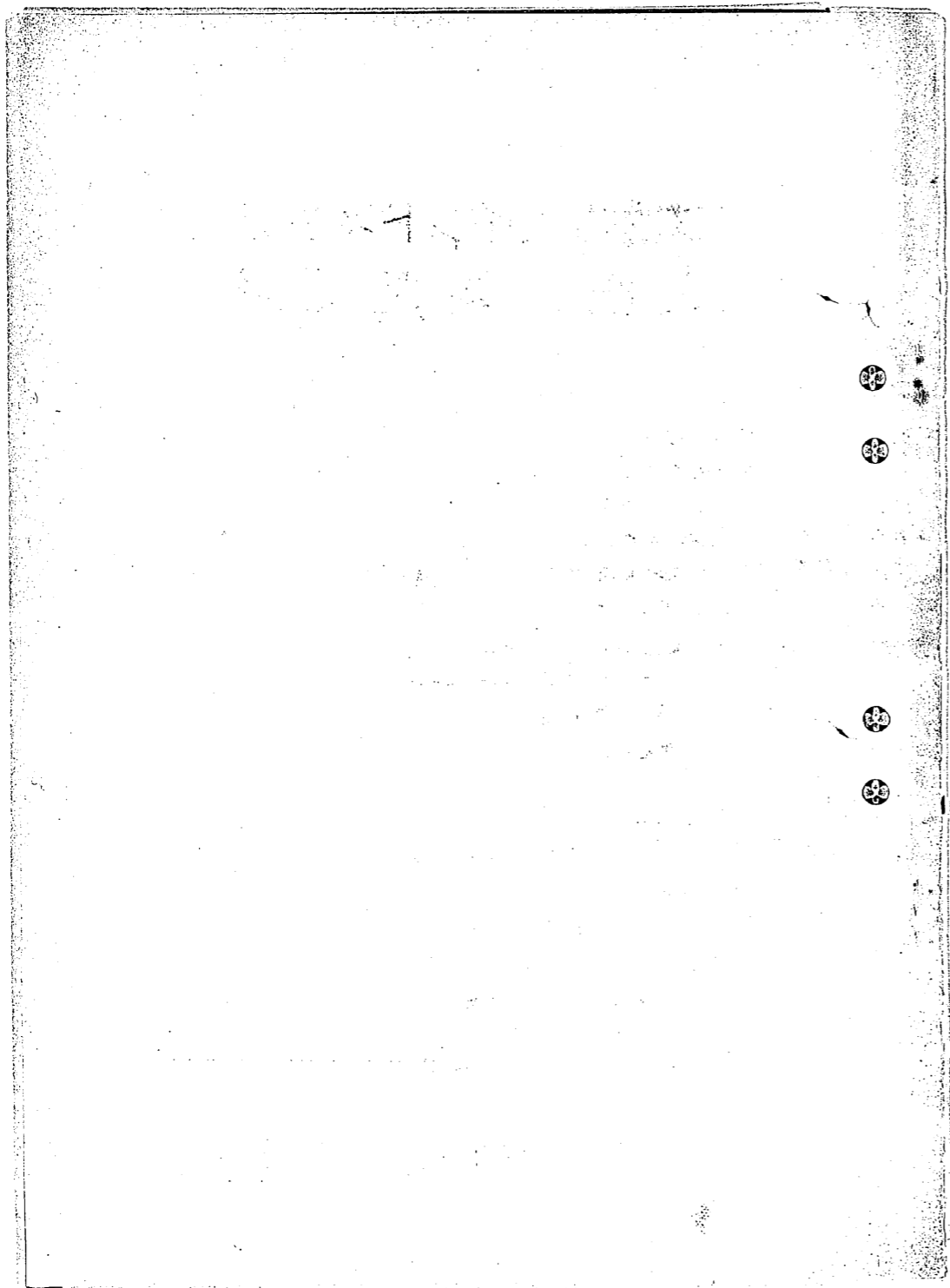
インドネシアにたいする軍用機の売却を許可している。

インドネシア外交のあり方を支配する大きな要因の一つは西ニューギニア問題であった。西ニューギニアは戦前の蘭領東インドの一部を構成していたが、1949年11月のハーグ円卓会議決定においてインドネシア領から除外され、その後のオランダ・インドネシア両国の交渉により、この地域の所屬問題を解決することとされた。独立後しばらくは両国間の交渉が行われたが、ことごとく失敗し、オランダはこの問題についての交渉を拒否する方針をとり西ニューギニアをオランダ領とし国連憲章の規定する非自治地域として統治している。インドネシア側はこれを同国領と主張し、1948年までの両国回国連総会に提訴したが常に否決された。

このニューギニア問題について西欧諸国はオランダを支持し、アメリカは中立態度をとり、国連総会の表決においても棄権していたが、その底意はオランダを支持しているものとされていた。これに反しソ連をはじめとする共産圏諸国はあげてインドネシアを支持した。西ニューギニア問題はインドネシア国民にとって最大の関心事であるため、これはインドネシアをソ連圏に接近せしめる大きな原動力となった。

わが国とインドネシアは地理的にも近接しているのみならず、両国の経済的構造からも密接な協力をなしうる立場にある。しかし賠償問題の解決が遅れたため両国間には一応領事関係が維持されたのみで、正常の国交が開かれなかった。

しかし1957年11月、岸総理大臣の同国訪問を契機として、翌58年1月20日ジャカルタにおいて両国全権間に平和条約、賠償決定その他関連文書の調印を見た。これらの平和条約その他はインドネシア側は同年3月13日、日本側は4月4日それぞれ国会の承認を経、同月15日東京において批准書の交換が行われ、同日付をもって在東京インドネシア総領事館は大使館となり、わが国はジャカルタに大使館を設置するとともに従来の総領事館をそのまま併置する措置をとった。これらの条約・協定によれば、日本・インドネシア両国の戦争状態は平和条約の発効をもって終了し、且つ日本は総額2億2千3百8万ドルの賠償（資本財および役務）を12年間にインドネシアに供与し、また4億米ドルに相当する民間の対インドネシア経済開発借款供与を関係法令の範囲内で容易にしかつ促進することとなっている。



RA'-0192

0348

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan

16:05

「両国々歌演奏」

司会者

「ただ今からインドネシア及び日本両国々歌を演奏いたします」

演奏終つて、司会者

「続いて東知事のごあいさつがございます」

外務部長

「全上を英語で」

16:08

東知事は日本語であいさつし、これを通訳はインドネシア語で、ノ節毎に通訳していく。

あいさつが終ると直ちにシヤンペンノの行き届るのをまつて、

16:10

東知事は

「インドネシア共和国の繁栄とスカルノ大統領閣下のご健康を祝して……乾杯！」

通訳は

「全上をインドネシア語で通訳」

16:13

司会者

「つぎにスカルノ大統領閣下のごあいさつがあります」

外務部長

「全上を英語で」

16:15

スカルノ大統領は、インドネシア語であいさつし、これを通訳は日本語で通訳する。(ノ節毎に通訳するかどうかは、その場で打合せする)

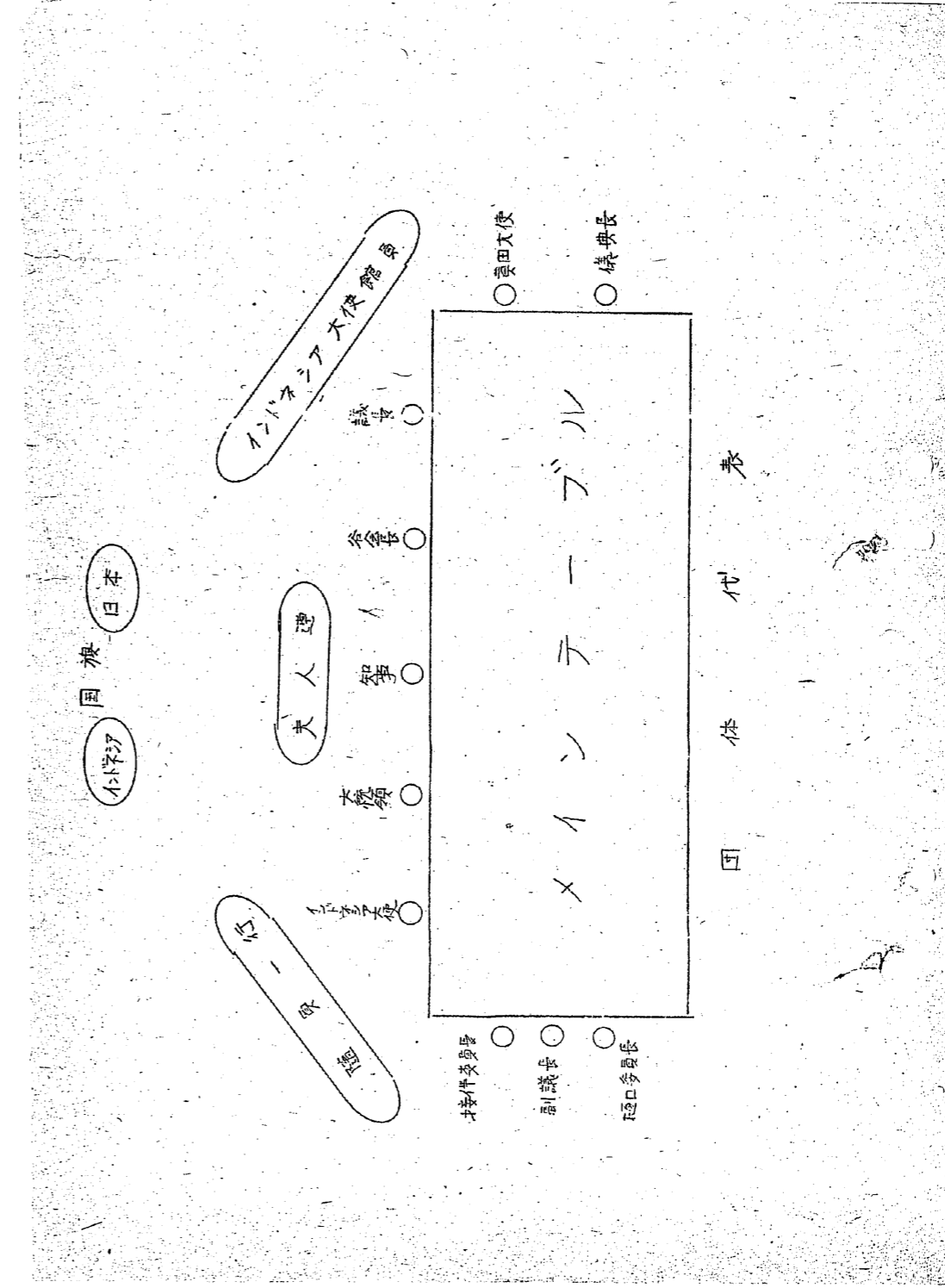
あいさつが終ると、スカルノ大統領の発声で乾杯。

16:20

歓談

17:00

大統領退場。



RA'-0192

0350

昭和34年5月30日

木村貞祐殿

東京都
知事 東 竜 太 郎
経済団体連合会
会長 石 坂 泰 三
東京商工会議所
会 頭 足 立 正
日本経営者団体連盟
代表常任理事 諸 井 貫 一
経済同友会
代表幹事 井 上 英 熙
国際商業会議所日本国内委員会
会 長 澁 澤 敬 三
ア ジ ア 協 会
会 長 小 林 中
アジア善隣国民運動中央本部
会 長 足 立 正
日本インドネシア協会
会 長 谷 正 之

国賓スカルノ・インドネシア共和国大統領閣下
歓迎レセプション開催ご案内

拝啓 新緑の候益々ご清適のことと慶賀申し上げます。
さて、このたびインドネシア共和国スカルノ大統領閣下は随員同伴来朝され、6月6日から同10日まで国賓の待遇を受けられ、その後も引き続き滞在されて6月18日帰国されます。
ついで、この機会に日伊両国の友好関係を増進するため、下記の通り歓迎レセプションを開催いたしますから、ご多用中恐縮ながらご出席下さいませようご招待申し上げます。

敬 具

記

- 1、日 時 6月10日(水曜日)午後4時—5時
大統領閣下は4時に御到着されます
(なお交通遮断の恐れがありますから、午後3時45分迄に御来場願います)
- 2、会 場 東京会館
- 3、服 装 平 服
追って、準備の都合上ご出欠の趣きを同封はがきにてご回示願います

(連絡先) 幹事団体
東京都中央区日本橋小網町2-14(洋糖ビル)
財団法人 日本インドネシア協会
電話(66)4596-7, 2956

RA'-0192

0351

外交史料館

Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

National Archives of Japan